

九月作品

月集スバル



空爆で家失ひしがザの子の涙忘れぬにその後を知らず

空爆で木端微塵のわが生家みづたまりとなりて雲映しぬき

お隣りのお兄ちゃんだつた人が著者『軍旗はためく下に』また読まむ

色好み

小山 富紀子 京都

朝風に好きな歌材がゆれてゐる八条池のむらさきの花

花しやうぶ咲く池の辺に亀の殿詩作するらし身じろぎもせず

花しやうぶの色に染めたき白蝶かいくそたびぐる紫の下

濃さも良しあはきもよしと花しやうぶめぐるこの蝶色好みらし

花しやうぶ色のパラソルゆらめかし飛び石踏めば蝶の追ひくる

宙の画面

水上 芙季 東京

ラッシュ時の京王線に母と乗り母は誰より小さくゐたり

父の日に渡したといふカステラをタッパーに入れ母はくれたり

パソコンは無くなり宙の画面見て仕事する日はすぐそこだらう

「この怒り説明しがいから行こうーバリ男」ラーメン汗たくで食おうー」

〈バリ男〉には男ばかりが並びたり店に満ちたるにんにくのほひ

☆今月の四人☆

楽ないちにち

大松 達知*東京

短歌つて右だと思つていたけどな、オーマツ、いつからそんなになつた？

喉痛き日は思い出す喉痛のどいたを押して饒舌ねただつた毛利ひいなさん

アオダモのけぶれる白を見ていれば娘はわれを見つめていたり

このなかに神さまがいて良いことをするとお金足してくれるの

機嫌よく帰つてきてはダメなんだ楽ないちにちと思われてしまう

反戦メモリアル

清水 正子 神奈川

メソポタミア出土の粘土板おもふ「麦酒はうまい戦争はいやだ」

葦の茎でかきたる楔形文字の粘土板あはれ反戦メモリアル

☆

☆



高野 公彦 千葉

大連れて散歩させをり婦人らは家事の隙間にまた仕事あり
スーパリーの買物ときに白菊の花加へたりやもをの我は
錠剤で腸内環境ととのへて夜は楽しむ日読みの酒を
酒を飲みながら手軽に作りたるコゴミの卵綴ちが旨いね
まだずつと生きてゐたいが真夜さめて寂し無音の真洞のひとり

仲 宗角 三重

水鳥 晴子 兵庫
川に沿ひあるいは逸れて幾曲りデイケア通ひの車中に黙す
葉ざくらのおほふ門より乗りこみつ車椅子なる人は無言に
道の左右さくら葉繁く迫り合ひ水無月くらし古き街すぢ
合歡のはな紅濃く描き老いびとは独り住まひの扉にかかぐ
地に漚ぶヤマモモの実に紛れをり小鳥のむくる泥まみれなる

杜 沢 光一郎 埼玉

意識もどらぬままに逝ぎにし老い妻の死を識らぬ妻の化粧してやる
兄弟姉妹の力も借りてにんげんの重みもつ妻を柩に納む
こもごもに柩の窓より覗きては化粧せし妻を綺麗ねと褒む
比叡山にて君と習ひし「甲ひ和讃」君の友らに和しつつ誦ふ
通夜の客ら帰りに供華に明るめる齋場に雨の音がしてゐる

武 田 弘之 神奈川

口笛を吹けば心ふる鶯のこゑ玲瓏と山に飴す
野に山にあぢさゐの花咲き盛り宮英子さんの五回忌近し
あぢさゐ忌とひとり名つけてありし日の宮英子さんを偲ぶ六月
ありし日の宮英子さんを思はせて帯状疱疹病む妻あはれ
わが家のスクレットオハラ老い病みてわれを走らす老いたるわれを

奥 村 晃 作* 東京

都市棲みの野良猫あわれこつそりと餌をやる人のお蔭で生きる
「野良猫に餌やらないで…」糞害に困っています」路地の立て札
野良猫に餌をやらなければ野良猫は死んでしまうぜ どうすればいい？
野良猫を庭にへ入れないへ追い払うためのグッズの様々を売る
公園の砂場廻りて柵が立つ犬・猫侵入防止の柵ぞ

森 重 香代子 山口

台原に白き基石を撒きしごと陽にしづもれり石灰岩は
ドリーネの窪の草生にあそぶ陽はやさしく隔つ地下暗黒を
台原に日は輝りわたりいづくにて啼くとも分かぬうぐひすの声
カルストの台原にゐて大空へ此処よ此処よと夫を呼ぶかも
これの世に近ひ得て夫と呼びたりし二人ながらに畏ひにけり



桑原正紀 東京

馴染みなりし床屋の前を通りすぎ千円カットの店へと向かふ見知りたる床屋の主人と目の合ふを避けて通りの反対を行く昔ながらの床屋へ行かずなりたるは金ゆゑならずおしやべりが苦しい人で好きゆゑ避けることもある情にほだされるのがこはくてアルへイ棒回れよ回れこの町の元気の徴として回れよ

狩野一男 東京

みなづきの夕映えうかべたつぷりと水路の水は躍るがにゆく戦ひて北方領土を取り返せの暴言ゆるすまじ劣化議員の気づかず人に傷つけ苦しめしことやあらんと過去ふり返る寺庭にほたるぶくろの咲き初めて末の子逝きし夏が来てゐるデパートに入りゆく人にひたと添ひ盲導犬の大き目は澄む

古屋祥子 群馬

利根川の水量増えて思ひやる源流はどれ程の雨であつたか蕎麦の花いまが盛りぞふうはりとは此処にうもれてわれも眠らうカロリーの制限に見ゆるものみな食べもの一つぶの飯も余さず突つく生き過ぎた悔いは何時から？ 九十歳越えテイ・サーピスの送迎を受く中国人「林」と「李」さん呼び違ふ名なれど畑作物は異なる

影山一男 千葉

おもてなしではなくごますり外交に踏まれてあはれ土俵の砂はお茶の水錦華公園六月の繁りの下を飛ぶものあらず目を閉ぢてゐたるに川を渡るとき光が誘ひひらく臉はバナマ帽買ひてもみむか堂々とした老人にもしやなれるや安定剂朝ごとに飲み保つかな青年の日の恋と文芸

小島 ゆかり 東京

シルバーカーの母と行くとき六月の曇りの空の重量を知る
かつて子が言ひし「自分でできるから」今は老いたる母が言ふなり
降るまへの雨の香濃ゆし武蔵野をおほふ樹木のつばさふくらむ
衰老のはのからだをめぐる水おもひつつ行くどしやぶりの街
季節はづれの寒き雨ふる六月の木曜日けふも二度なきひと日

木畑 紀子 京都

はやばやと朱夏の花屋にサルビアのまつかな穂花ならぶ妖しさ
燃ゆる緋のサルビアの辺に醒むるがに藍涼しもブルーサルビア
モンシロは緋よりも藍が好きらしくブルーサルビアの傍をはなれず
一張りのテントが守るさつき展 鉢に花の名作者の名あり
歌作りにまさるよろこびあるならむ蝶、蜂を招く花作りびと

島田 暉 神奈川

馬鹿げたる噂話に笑ひしが少しも笑はぬ眼にあひにけり
愛想よき言葉ならねどあたかき栃木の苺を届けくれたり
つつしみの深き美人に案内され言葉ではなく笑顔で返事
わが庭の白き牡丹の花の艶朝夕変る妻のこころも
ひさびさに妻と待ち合はせしたる駅初夏の日射しは匂ひ渦巻く



田宮朋子 新潟

人住まぬ曲庵まげいばあはれ屋根のうへ何やら草の花が咲きゐる
空き家には魍魎まげいばの棲むらしガラス戸の内の障子がみな破れをり
家、倉、納屋、木々、庭石の撤去されのつべらぼうの矩形残れり
ながらくの空き家きれいにこはされて平らな土の上に〈空〉あり
〈因〉により〈果〉を得るならず〈果〉のなかにゐながら〈因〉を生きてゐるわれ

津金規雄 神奈川

「花の間に渡せる橋を幻視せよ」燕子花図屏風われに語り来
屏風絵に見入る業平かたむきし冠をただす咳払ひして
屏風絵の前に乙女らささやけば金地の水面はつか波立つ
新緑の色を奪ひし夕闇は甘き匂ひを放ちてやまず
燕子花咲く夕池はカラコンの瞳と見ゆらんか雲間の乙鳥に

小嶋一郎 佐賀

みぎひだり注す目葉を違たがへたり妻の欠伸を見しのちのこと
この先は砂利道なればけふもまた引き返すなり三一〇〇歩
庭草を生やさぬための究竟きうきやうはただに一途に取るほかはなし
庭隅のカボスタふとし近づけば人為に拠らぬ香を漂はす
魚沼を巡りたる日の布靴をいまだ棄て得みそとせず三十年を経て

後藤美子 北海道

リラ過ぎて光あたたかキングサリ黄の花ながく垂るる季となる
楡の種子舗装路の縁に散り溜り風来るたびに片寄りうごく
桐の花今年は早し双眼鏡あやつりて仰ぐ美しき紫
時かけて筍を茹で若筍煮ことしもつくる夫とわがため
われよりもみな歌うまし歌誌を閉ぢ茫と見てゐる雨降る空を



田中愛子 埼玉

収穫の頃にあげると言はれたる未来の芋に礼を述べたり
老母が脛はざもまれつつ我に言ふ「よういとネ」とは「そつとネ」のこと
別れから四十年経る春の日に母がつぶやく父への不満
政治家の失言は本音、すぐ撤回されてわれらもすぐ忘れたり
もう一度ハーブのかをり確かめて石けんおろす梅雨寒の朝

橘 芳園 新潟

福士りか 青森

どくだみの香り清しと思ふまで生きたりけふはわが誕生日
小雨ふる午後のバス停しおしおとドクダミゆれて香りたちたり
キーボードを小型に換へぬ右の手の分もはたらく左手のため
〔医師監修マウス〕六八〇〇円あほらしけれど手のために買ふ
シャンパンの小瓶なれども華やかにコルク跳びたりわが誕生日

藤野早苗 福岡

スイッチを入れれば小田部雄次氏が 令和元年五月一日
制服を見れば過呼吸多発汗連休明けの朝の少女は

二十余年住むこの街で遺憾なく發揮してゐる方向音痴
一夜さに降りゆきしかへはらりさんしらぬひ筑紫の剛のうた詠み
巻きもどしかなはぬ時間の翳る辺に童頭の碧き石かがやけり

風間博夫 千葉

電車ドア閉めるは「今」と独り決め車掌は車掌スイッチを押す
ドア閉めるチャンスチャンスを車掌見逃さず 新宿駅いまだドア閉まりたり
閉まるドアすつとカバンを挟む奴、ドア開けばカバン、奴が乗りこむ
小便シソウにあらずと聞けり「熊本熊クマモリ」ゆるキャラ「くまモン」熊本の熊
歯型取るときにじわつと出るよだれ（鼻呼吸）よだれ「くんとしたり

水上比呂美 東京

鶏卵に混じりたる血のひとつに戦に征きし少女ら思ふ
「戦争は女の顔をしていない」戦ひしロシアの少女の証言
幾百の少女の（戦）蔵はれてページ繰るとき指ふるへをり
勝利せしロシアも敗北せしドイツも人間死にきずぶずぶ死にき
日本の戦争体験者を訪ね聞き取りせねば、過ぎゆく時間

鈴木竹志 愛知

会はざればみな老いてゆく歌会にかつて集ひし人らは如何に
歌会の中の宴の樂しきは歌の話の他は無きゆゑ
鳩でなくカラスが餌を漁りある金山駅の昼のホームに
わが前の女子高生は文庫本しばらく読みて後にスマホを
塵、埃ぬぐひとられて大空のキャンバスま青 夜半に雨あり

原賀 環子 東京

言外のひとの気持にきづきたり真昼しづかに米をどぎつとどぎ流す水より米をひろふとき転瞬祖父へおもひは移る

「一粒も米は捨てるな」おぢいちゃん教へてくれてゐてありがたう三角のお結びとなるおぢいちゃん、をととひは鮨めしとなりたりおむすびを小腹にをさめベンを持つ持てばおのづと言葉へ対ふ

大野 英子 福岡

父の縁ありて親しきうたびとの梅雨じめる昼計報を聞きぬ検査だと言ひ十日後に逝きし人何もお礼が言へてゐません行橋弁のときに激しくはた柔き声をりをりによみがへりくる葬儀へと向かふ高速道の壁すでに夏草おほひて暗し栗の花、開ける竹群、ねむのはないづれも重苦しきまで揺るる

松尾 祥子 東京

五月もう鶯のかたちの見えねども岩手山はも雪のこりをりササラ竹背負ひ太鼓打つ鹿踊り踊る男ら若くはあらず舞ひ終へて鬼剣舞の色冴ゆる面をはづせり汗ぬぐひつつ歌をかたり南部美人を酌みかはす北上川を見おろす店に『六六魚』肴にわれら盛り上がり(沈流亭)に酔ひてさうらふ



第二刷

高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

明月記を読む

コスモス叢書第1148編

短歌研究社

— 定家の歌とともに 上下

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-二-二五〇六

奥村晃作歌集

平成31年2月刊 一四〇〇円(税別)

送料三〇〇円

八十一の春

コスモス叢書第1150編

(株)文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-一五-一六

第二刷

第34回詩歌文学館賞受賞 第17回前川佐美雄賞受賞

小島ゆかり歌集

平成30年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

六 魚

コスモス叢書第1143編

本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二-八-二七一九一四

木畑紀子歌集

令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ

コスモス叢書第1157編

現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一-二二-二〇